蓮如信仰の一考察　(二)

阿部法夫

前回は大谷派の「レンニョサン」という年中行事を通して筆者なりの蓮如観を描いたのであるが、今回は本願寺派で実施されているもう一つの「レンニョサン」を紹介していこう。

三の(二)　本願寺派の「レンニョサン」

春弥生下旬、吉崎別院での「蓮如忌」にあたって、京都の東本願寺よりご下向される有名な蓮如御影とは別に、いま一つの蓮如御影が毎年七月初めに吉崎と福井の間を巡行している。浄土真宗本願寺派で行われているもので、本願寺派では「蓮如上人真影下向（あるいは御帰山）」と呼んでいる。蓮如御影も「蓮如上人真影」と称しているので本稿もこれに従っておこう。

先にも書いたが、本願寺派の「レンニョサン」の調査報告は看見の限りない。筆者は去る昭和四十六年にある程度までの実態を知る機会があって、それを一応まとめて卒業論文の一部分とした。さらに、この昭和六十三年七月にはながく念願となっていた巡行の随行もさせていただいたのであった。

その時のメモと知り得た諸文献をもとに、世に知られることなくささやかに続けられてきたいま一つの「レンニョサン」を明らかにしておこう。

さて、吉崎・福井間約四〇キロを巡行する蓮如真影は通常本願寺派吉崎別院の境内にある立派な「中宗堂」(1)に奉掲されている。この中宗堂において参詣する善男善女の礼拝をたえず受けている。そのためであろうが、下向

先の福井別院でも巡行する各地域の立寄所でも蓮如上人の御姿、すなわち蓮如真影を拝むことはできない。

「レンニョサン」の下向出発は七月一日か二日の早朝である。一日出発時は永平寺の各地を巡行するため時間が足らず、一泊して福井別院へと向かうため一日早く出るのである。二日出発の時は迂回せずに直接福井へと向かうことになる。

蓮如真影は「御箱」に収められて巡行するのだが、その「御箱」は櫃（ひつぎ）のような木箱で、大谷派のものより幾らか小振りで、一人で捧げ持つことができる大きさである。それは御輿に入れられて、御輿は軽トラックに乗せられて、吉崎から金津町各地、丸岡町各地と巡っていく。吉崎別院輪番か副輪番を随行長として、随員約四〇名の大部隊の一行がマイクロバス・乗用車二台（別院からの記念品を積んだ一台と随行長を乗せた一台）・御輿を乗せた軽トラックの四台編成で進んでいく。

各立寄所に着くと、蓮如真影は輿ごと家の中に随員の肩に担がれて入っていく。すぐに勤行が始められる。勤行は短い偈文（歎仏偈をあげる。讃仏偈ともいう）・短念仏・願以廻向の順に随行長導師のもと、参拝者も唱和して勤まる。引き続き、随行長により「レンニョサン」の由来とともに説教がなされる。それが済むと輿前に供えられた焼香台へ参拝者が合掌してお参りする。このような蓮如忌習俗が一日中繰り返されるわけである。

昔は全コース御輿を肩に担いで運んだという。それは長く続けられたようで、現在四〇名近くの随行員があることにその名残りを止めている。車社会の発展の影響からか、担いて運ぶことから荷車に乗せて、さらに軽トラックにかわり、あっという間に村々を通り過ぎていく。そうした姿には、大谷派の一週間全行程徒歩にくらべて、季節はずれの感とともに伝統行事の重さというものがなかなか感じられないのは筆者のみだろうか。

七月二日夕方、福井別院に入るとすぐに真影は本堂右余間に御輿のまま安置される。それより一〇日間「蓮如上人讃仰（さんぎょう）法要」が厳修される。讃仰法要といっても特別な法事を勤めるわけではなく、時期的にいわゆる永代経法要が一〇日間続けられるだけのようだ。

七月十一日朝早く、蓮如真影は福井別院を出発して御帰山コースを運ばれていく。

昭和六十三年当時のコースは、

福井別院→福井市内→春江町→丸岡町→坂井町→芦原町→金津町→吉崎別院

となっていた。

しかし、昭和四十六年の調査では、次のようにご教示いただいた。一年交替で次のコースを巡る。

①福井別院→福井市内→春江町→坂井町→金津町→細呂木→吉崎別院

②福井別院→福井市川西方面→春江町→芦原町→吉崎別院

なお、下向コースも三ルートあるという。立寄所によっては五～六年のサイクルで巡ってくる勘定になる。覚えにくいと感じた。これも年毎に少しづつ変化しているようだ。

「レンニョサン」の世話は「吉崎別院世話世話方」[2]がこれにあたる。その世話方の大半は、吉崎周辺に住む農家の門徒であり、その他各立寄地の世話方も少しくいる。「レンニョサン」に参加して蓮如真影とともに巡行する人は、主として「吉崎別院世話世話方」の中

より選ばれることが多い。しかし、時には世話方以外の門徒の方が一生に一度奉供したいと参加される場合もあるという。このように随行する人は自主的参加によるわけである。

世話方が本願寺派吉崎別院に集まり、基本的な巡行計画をたてる。この時点でほぼ当年の巡回ルートが決定される。個々のお立寄の家については、各地区の世話方が立寄希望を聞いて、四・五月の「レンニョサン」の頃には最終決定がなされる。毎年必ず立寄る家もあるが、ほとんどは毎年入れ替わって違った家を選んでいるとのことである。

本願寺派の「レンニョサン」の主役である蓮如真影は、蓮如上人が文明七年（一四七五）八月下旬六十一歳にて吉崎退去の折、北国一円の門弟たちのためにカタミとして書き残された画像であると伝承されている。大谷派の蓮如御影伝承とほぼ同じであることはおもしろい。

真影の裏書については、

蓮如上人真影　　釈准如（書判）
慶長十六年辛亥五月廿二日
越前国坂井郡金津上野吉崎廿五日講中

となっているとのことであった。[3]

以上で本願寺派の「レンニョサン」の概略を終わるが、昭和四十六年当時の吉崎別院副輪番の佐々木教応師には深く感謝する次第である。筆者の調査依頼に心よく引き受けられ、懇切ていねいな文面でご返事をいただいた。ここに特記するものである。

次に、昭和六十三年の「レンニョサン」の随行記録を記しておこう。

蓮如上人真影御下向随行記

昭和六十三年七月二日早朝六時すぎ、吉田郡永平寺町上浄法寺にある西村嘉一家へ車で急ぐ。同家を捜し当ててお伺いすると、すでに「蓮如上人真影」は立たれた後だった。広い家の中はふとんと仕出屋の料理箱で雑然としていた。四〇人近くの人々が西村家に泊まったためである。

早朝お勤めがあり、本願寺派吉崎別院の輪番（「レンニョサン」の随行長である）のお説教があって、時間通りに立たれたという。家の入口には「蓮如上人真影御下向お泊り」の張り紙があった。永平寺町へは三～四年に一度の割合でお立寄りがあると西村家の方より伺うことができた。

前日に本願寺派吉崎別院の方へ七月二日が御下向の日ですねと確認の電話を入れたのだが、永平寺の方へ廻るため、七月一日の朝早く吉崎を立たれたとのことであった。その時に電話に出てこられたのが、先述の佐々木教応師（今はすでに故人）のご子息の方であった。故人のご冥福を祈るとともに、不可思議なめぐり合わせ、強い御縁というものを感じた次第で、あえて付記する。

そんな訳で、御下向随行は二日間のうち一日だけのものとなり大変残念であった。

西村家をおいとまして、浄法寺の天谷道場・吉波の尾川道場を経て、七時半ごろ、栃原の尾西英男家の前でやっと「レンニョサン」の一行に追いつくことができた。マイクロバスが在所のせまい道に入り込んでいる。運転手に「レンニョサン」ですかと遠慮がちに聞くとそうだと答えた。

マイクロバスがなぜ必要なのかはすぐに分かった。尾西家から蓮如真影を収めた御輿が出てくると、人々が合掌してぞろぞろと追いすがるようについてくるのであった。見送り

の門徒の方々かと思ったが、それらのほとんどがバスに乗り込んでいくのである。

久し振りにこの在所に訪れた「レンニョサン」にお会いしようと集まってこられた門徒の方々は、お念仏の声とともに合掌して深く頭をたれて御輿を見送っている。御輿は軽トラックに乗せられ、「蓮如上人御影」と染めぬかれた旗をなびかせてもと来た道を戻っていった。一方、集った門徒の方々にはお供えとして飾られていた駄菓子が家人によって配られていた。

随行長である吉崎別院の輪番と役員僧の乗った車、御輿を乗せた軽トラック、門徒世話方の車、そして随員総勢三十五人を乗せたマイクロバス、これが本願寺派の「レンニョサン」の一行である。一〇名ぐらいの随員で全コース徒歩で巡行する大谷派のものを見慣れた筆者にとって、なかなかイメージのわかない陣容であった。大変な大世帯であり、スピード感あふれる「レンニョサン」なのであった。

かつて、学校の用務員のおじさんやトウフ屋さんなどが鳴らしていたカネをふり鳴らして、蓮如真影を乗せた軽トラックの荷台に頑張っている門徒側随員の責任者が「レンニョサン」の出発と到着、在所の通過を知らせていた。ただし、車での移動であるため、沿道ぞいの家でも「レンニョサン」のお通りが分からないことが多く、必ずカネを鳴らしてほしいと言われることが多かった。真影を車に乗せて運ぶようになったのは二〇～三〇年以前よりとのことであった。

尾西家出発は八時十六分。浄法寺橋をわたり、九頭竜川の反対側にある光明寺の加藤伯一氏宅へ向う。同家到着八時三十分。役員僧や随行員によって捧げ持たれた御箱がその家の中に入っていくと、待ち受けた門徒の人々の間から念仏の声が聞こえてくる。

ここで随行の人々に目を向けてみた。福井別院と吉崎別院のはっぴを着た人が混っている。それぞれの別院の世話方を表わしている。木製の賽銭箱を下げたおばあちゃんが多く、中には四〇年近くも随行参加しておられる腰の曲った老女がとても印象的であった。御輿を軽トラックから出し入れする人も決ってい

るようであり、カネを鳴らす人がそのまま出し入れをすることになる。その人が門徒側の責任者であり、立寄りの門徒の家との交渉はすべてこの人を通して行われる。大谷派の場合、道中賽銭は布製のもので集められる。賽銭袋で歩けば負担にならないためだろう。こんなところにも両派の差というものを感じたことである。

加藤家出発八時五十五分。同じ在所の斉川覚信氏宅へ向う。到着は九時五分。御輿のまま同家に入り、蓮如真影は仏壇前に奉安される。御輿の前には華やろうそくが飾られ、焼香ができるように香炉が置いてある。お勤、説教の後、参詣者全員が次々に焼香していくのである。

斉川家出発九時二十九分。上谷口の渡辺行男氏宅へと急ぐ。同家着九時三十五分。例のごとく、勤行・説教・焼香と続く。

渡辺家出発十時十分。東古市をまわって大本山永平寺の方向へ向って、山村の山諏生活改善センターに到着したのは十時二十三分。同センターは、入口に鐘が吊されており、道場風のコミュニティセンターである。急な階段を御輿を担いで数名の人が登っていく。中ではすでに二〇人程度の門徒の人々がお待ち受けしている。

さっそく勤行が始まり、説教がなされる。随員も参詣するため、各立寄所で同じ話はできない。随行長のお説教も各所で少しづつ違わしていることは、大谷派の特別教導とはいささか気苦労が多いのではないだろうか。

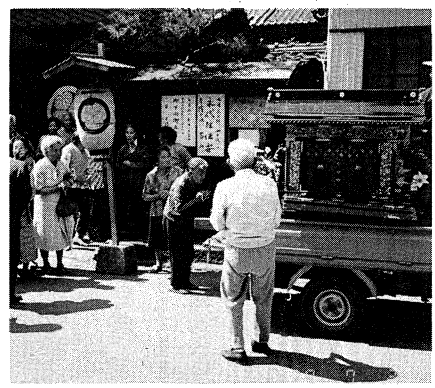
生活改善センターを出発したのは十時五十四分である。少しづつ大本山永平寺のおひざもとまで進んできている。

京善の次の立寄地に到着したのは十一時であった。そこは〝教善の御堂〟と呼ばれている、もう寺院といってもいい程の大きな道場である。そのため説教もいくらか延びたようであった。ここでは約四〇人のお待ち受けがあった。十七年ぐらい前からの恒例のお立寄りとなっているとのこと。

同所出発十一時三十分。荒谷の荒井健一氏宅に着いたのは十一時四十六分であった。随行員にお茶・茶菓子の接待があるのはすべての立寄所に共通であった。同家には約三〇人の参詣がった。もう少し奥へ入れば大本山永平寺の山門が見えてくる。

荒井家出発十二時十三分。少し道をもどり東古市へと向う。走り過ぎる御輿の「レンニョサン」に深々と合掌する女性を見つけるとこちらも合掌で答える。そんな情景はつきなかった。

午前中最後の立寄所は東古市の大運寺である。十二時二十分着。参詣は一五人ぐらい。



例のごとく、勤行、説教、焼香と続く。随員もお参りするため本堂は一杯である。説教の後、随員は別室で昼食をとる。午後の最初の

立寄所が都合で取りやめになっているので遅く出発してもよく、随員は疲れた体を休ませていた。

大運寺出発は午後一時三十分である。永平寺町を後にして福井市の方へひた走る。一時四十二分に次の立寄地である松岡町芝原にある摂取寺に到着。

ここでは約三〇人ものお待ち受けがあったが、御輿が寺の本堂に入るとあちこちから合掌してお念仏申される人々が多い。出発の時輿を止めてしまい、なでさする老女が多数いた。聞くと無病息災のご利益があるという。

摂取寺出発二時二十五分。次の立寄地である松岡町吉野堺の集落改善センターに着いたのは二時三十分であった。約三〇人の参詣お待ち受けがあった。例のごとく読経の後お説教があった。

その間に責任者が次の立寄地に電話連絡をとっているので、時間的に割合スムーズにいっているようである。

しかし、立寄所の家の人は大変であろうと思われる。四〇人を超える随員一行はもちろんのこと、近所からの参詣者にもお茶・茶菓子の接待をしなければならないからである。このような苦労は大谷派においても同様であったろう。

同センターを三時一分に出発。すぐに福井市に入ってくる。原目町・寮町・上北野町を経て、北四ツ居町集会所に着いたのは三時三十一分であった。「レンニョサン」の到着を知らせるのはカネではなく、カミシモ姿の男性が小さな太鼓をうって在所の者に知らせていた。

集会所の入口には「蓮如上人真影御立寄塚谷招待」の張り紙があった。このような張り紙は各所に共通するもので行く先々で見受けられた。

四〇人ぐらいの人がぞろぞろと集まってきたが、いつもより遅いといわれてしまう。三～四年おきに永平寺の方を廻るため、記憶も薄れてしまい、地図がたよりの道中である。車で廻るため移動が速く、道をまちがえてしまう事もあろう。随員の表情が少し暗くなる。

同所を出発したのは四時六分である。長本町にある道端実氏宅に到着したのは四時十四分である。道端組の看板が大きく目につく。参詣はいつもより多く四〇人は超えている。御輿がやっと通れるぐらいの玄関から家の中に入り、蓮如御輿は仏間に向う。随員にはパンとジュースの接待があった。

道中の賽銭で別院経営を護持しているのは両派とも共通である。

同家を出発したのは四時三十九分。もう少しで福井別院である。宝永三丁目の絹甚宅に到着が四時四十六分である。玄関が狭いため御輿は入らず、玄関前に輿は置かれる。蓮如真影のみ家の中に入り仏間に奉安される。御輿の前には香炉・花で飾られている。二〇人程度の参詣者があった。

近所の人でも本願寺派の「レンニョサン」を知らない人があるらしく、吉崎から京都へ行ってまた帰ってきて各地を廻るというように、大谷派のものと本願寺派のものの道中を混同して理解していたようだ。生まれて初めて見るとつぶやいた老婆もおられたが、その合掌の姿は尊いものだった。また、御輿に触って、孫娘だろうが、その頭をなでさする老女が見受けられた。なでられた子はそれを見てけげんそうな表情をしていた。真宗の門徒で

あっても人間の気持ちとして頭が良くなってほしいのだろう。こんな光景は根強く残る日本人の民俗性をあらわすといってよいだろう。

同家を出発したのは五時十四分であった。本願寺派福井別院へは五時十八分に到着。いくぶん暗くなった道を本堂めざして進んでいく。

別院では到着を知らせる呼鐘が鳴らされ、本堂内は随員、参詣者合わせて六〇人ぐらいのお参りがあった。蓮如真影は随員の手によって御輿ごと本堂内に入っていく。

総灯・総香の荘厳の内、黒衣・五条袈裟の導師（本願寺派福井別院輪番）と布袍（ほう）・輪袈裟着装の別院役員七名の合掌で勤行が始まった。讃仏偈・短念仏・其仏本願力廻向の順で進み、後に説教が続く。随員には二日間の労が労われ、十一日まで「蓮如上人讃仰法要」が厳修されるとのお話であった。

説教が終ると随員の手によって御輿は向って右の余間に奉安される。真影の入った御箱は別院役員の手によって余間中央に安置される。その前には紅白の餅が並べてお供えされていた。

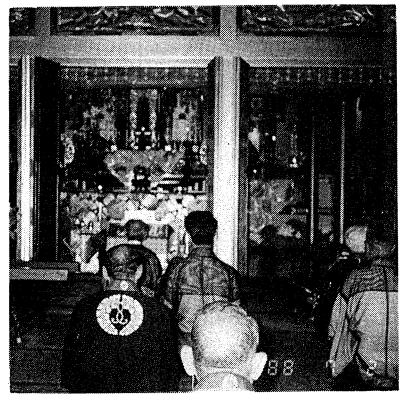
随員は本堂横にある門徒会館にて夕食をとった後、解散となる。

讃迎法要の間、真影は開帳しない。御箱と御輿が余間に安置されているだけである。法要の内容は、吉崎における蓮如忌とは違って時期としての永代経のおつとめが続くという。

ちなみに、随行できなかった御下向第一日目の順路は次の通りである。

金津町吉崎　吉田十一氏宅
同町細呂木　巻田栄三氏宅
同町指中　伊藤照光氏宅
同町青ノ木　公民館▲
同町高塚　佐藤栄治氏宅
同町前谷　土屋正信氏宅
丸岡町下長畝　岡崎重成氏宅
同町女形谷　山出時政氏宅
同町霞　霞教会▲
同町谷町　二祖堂▲
同町内田　辻川一三氏宅
同町山崎三ケ　西田長氏宅
同町野中山王　公民館
同町板倉　林田重盛氏宅
同町上久米田　元井清一氏宅
同町為安　表輝氏宅
同町近庄　橋本敏氏宅
永平寺町鳴鹿　鳴鹿道場
同町下浄法寺　朝倉道場
同町上浄法寺　西村一孝氏宅
同町上浄法寺　西村嘉一氏宅
（宿泊）

▲印は毎年お立寄りされる所である。順路については本願寺派吉崎別院でつくられた「お立寄り表」によった。



さて、以上で御下向の随行記を終ることとする。本願寺派の「レンニョサン」の各立寄

所には、大谷派のものと違って由緒・伝承・伝説の類はないと見てよい。毎年入れ替えてなるべく多くの門徒の皆様の家を訪問したいと別院関係者から聞かされたせいもあって、積極的に質問して伝承類を収集しなかったこともあるが……。

本行事の道中の決定は無作為に決められることが多い。蓮如という人物を広く知らしめること、行事の周知を目的として決められ、希望も取り入れて決定されている。大谷派のものと比べて開かれた行事であるといえるだろう。しかし、毎年同じようなメンバーが随行するという閉鎖性、一日か二日間で全行程が終ってしまうという短期性、スピード性、毎年決まったルートを通ることがないという不規則性、このような点で大谷派のものほど伝統的な年中行事とは言いがたいと思われるが如何なものだろう。

いずれにしても、大谷派・本願寺派の両派とも少し形は違っていても永く蓮如上人の遺徳を偲ぶ宗教行事を続けてきていることには変わりがない。

さて、御帰山の随行もさせていただいたので、以下順路にしたがって記していこう。

蓮如上人真影御帰山随行記

本願寺派福井別院に着いたのはまだ暗さの残る午前五時半ごろであった。すでに別院では、おあさじが始まっていた。マイクロバスに乗って御下向と同じようなメンバーの随員が到着する。随員と参詣人で約一〇〇人のあつまりである。勤行（正信偈、短念仏、願以廻向）の後、御文があげられ、引き続き説教となる。

別院出発六時十五分。どしゃぶりの雨の中四台の車は出発し、宝永三丁目の青木パーマ屋へ向う。同家到着六時十八分。蓮如御影は輿より出され家の中に奉持されて入っていく。約一〇人の参詣である。朝早くでも蓮如さんのお送りということで近所から参詣があった。

同家出発六時三十四分。春山二丁目にある岩崎紀之氏宅へ向う。同家到着は六時三十九分であった。玄関前に御輿が置かれ、御影の入った御箱が家の中へ入れられる。輿前にはお仏飯・おかざり・焼香台などが飾られていた。立派な荘厳であった。一〇人程度の参詣があったが、数人は家の中に入らず輿まいりで済ましていた。

同家出発六時五十六分。おかざりが参詣人に配られていた。六時五十八分順化二丁目の森永テント屋到着。旧北陸街道沿いのため、旧い造りの店である。輿前荘厳も先と同様で立派なものであった。例の如く、勤行・説教・焼香と続く。

同店出発七時十八分。すこし離れた小大黒屋へ向う。ここも御輿より御箱を出して家の中へ入れる。ご当主のみ仏壇前で参詣した。

同店出発は七時三十六分。道を戻るようにして松本二丁目の近藤文雄氏宅へ。同家到着は七時五十四分であった。御輿は家の中に入って勤行、説教、焼香と続く。同家の近くの電柱には「蓮如上人御帰山御立寄」の張り紙があった。約一二人の参詣である。

朱の輪袈裟（式章という）は随行員の目印であると聞く。吉崎別院には八〇〇人もの門徒世話方がいるという。その中から選ばれるのであるから大変名誉なことであろう。

同家出発八時二十三分。降っていた雨もいつの間にかやんでいる。出発にあたり、参詣のお年寄は競って輿をなでさすり、蓮如さん

との別れを惜しんでいた。

北上して舟橋町の林昇進氏宅へ向う。同家到着は八時三十七分。同家はもと造り酒屋をしていたらしく、太く黒光りした柱が印象的であった。広い仏壇前に幕を張り、威儀を正したご当主他三〇人もの参詣があり、真宗王国福井の姿そのものと感じた。

同家出発は九時三分。参詣のご門徒の全員のお見送りで「レンニョサン」随行の感激を新たにしたものである。九時十分には石盛町の桑野茂左衛門氏宅に着く。同家にも幕が張ってあり、カミシモ姿の参詣人には信仰心の厚さを感じたものである。例の如く、勤行・説教・焼香と続く。

随員の構成について伺うと、大谷派のような「宰領」・「供奉」という呼び名はないが、「会計」・「随行代表」・「随行員」というような門徒側の構成であるという。

同家出発九時四十四分。いよいよ春江町に入っていく。春江町江留上縁町の坪内巌氏宅に着いたのは九時五十五分。約三〇人もの参詣があり仏壇前は人で一杯である。

同家出発十時二十八分。同町為国西之宮にある東野武夫氏宅に着いたのは十時三十二分であった。造園業を営むかたわら、宗教的な掛軸類を広く収集し仏間に所せましと掲げてあり、家の造りも旧く、昔は庄屋も務めたであろうと思われる家であった。最初は二〇人程度のお参りであったが、次第にふえて四〇人ぐらいの参詣人になった。

同家出発は十一時である。十一時五分には春江町境上の深諦寺に到着。同寺ではちょうど永代経法要が始まっており、たくさんの参詣人があった。説教が始まると五～六〇人にふくれ上った。

同寺出発十一時五十二分。丸岡町に入っていく。十二時には丸岡町舟寄の林下（はやした）友太郎氏宅に到着する。同家も広い庭をもつ立派な造りである。四〇人は参詣している。興前荘厳も立派なものであった。

十二時三十七分同家出発。坂井町若宮にある北野喜一氏宅へ着いたのは同四十二分。興ごと家の中に入れられて、勤行・説教と参詣人五〇人相手に続けられる。一方、随行員は別家で少し遅い昼食をいただく。御帰山にルートが三つあって中のルートの時は若宮で必ず昼食をとるという。

同家出発は午後一時五十二分。坂井町上新庄の遵照寺に着いたのは一時五十九分。降ったりやんだりの雨もすっかり上っていた。約四〇人の参詣のもと、勤行がなされ続いて説教があった。山門には

吉崎別院蓮如上人御影お立寄

七月十一日午後二時

の看板が目についた。終わると満堂の参詣の人々の合掌のなか、出発していく。

同寺出発は二時二十五分。二時三十五分には同町五木の山口主税氏宅に到着する。同家では三〇人近くの参詣があり真宗門徒の篤信の様子がうかがえる。

同家出発三時七分。坂井町上蔵垣内の伊藤平一郎氏宅に着いたのは三時十五分。約三〇人の参詣であった。

同家出発三時三十六分。同町東村の清水清一氏宅に着いたのは三時四十一分。村境まで数人のご門徒がお出迎えされていた。四〇人もの参詣人であった。

同家出発四時八分。十三分には同町西村の虎尾一夫氏宅に到着する。約六〇人の参詣。

子ども達のおまいりが多いのにはびっくりさせられた。説教の間も次から次へと焼香する人でひっきりなしであった。

四時四十二分同家出発。坂井町をすぎ、芦原町に入っていく。芦原町下番にある興源寺に到着したのは四時五十七分であった。合掌してお待ち受けの人々が約八〇人あった。興は本堂に入れられ、勤行・説教と続けられる。

同寺出発五時三十八分。同町二面の区民館に着いたのは五時四十九分。芦原温泉街を見おろす坂の途中にある。勤行の後説教がなされる。三〇人程度の参詣である。

同館出発六時十四分。いよいよ最後の立寄所である金津町蓮ヵ浦へ向う。杉田善太氏宅に到着したのは六時二十八分であった。五〇人もの参詣人で家の中は一杯になった。夜も近づいているのに子どもたちの参詣が多かった。

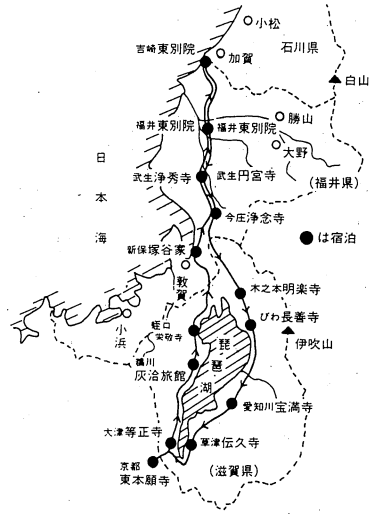
同家出発六時五十八分。暗くなった道をひたすら吉崎別院へと向う。別院到着七時十二分。中宗堂に輿は運び込まれ、蓮如真影が掲げられる。その間扉は閉される。きちんと蓮如真影が掲げられると扉が開かれて、勤行が厳粛に始められる。随員の人々の顔に蓮如さんを運び終えたという安堵感と、再び別院で蓮如さんを拝めるという法悦感が漂う。輪番の労いの言葉があり、すべて終了する。その後随行の人々は食堂で僧俗合同で会食をした。

以上で本願寺派の「レンニョサン」の御下向・御帰山の随行記録を終え、文献上から探っていくことにしよう。

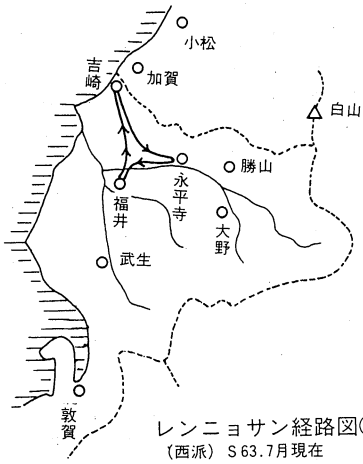
まず、蓮如真影についてだが、『金津町の史話と伝説』に次のような記述がある。

宝物には蓮如上人真影があるが、これは准如上人が慶長十六年に金津の上野（うわの）講中へ下附された御影である。もと金津の浄善寺に伝わった宝物であるが、西別院建立の際上納して中宗堂に安置したのである。(4)

すなわち、金津の浄善寺に伝来した蓮如真影が本願寺派吉崎別院の



レンニョサン経路図①
（東派）S46.4.5月現在



レンニョサン経路図②
（西派）S63.7月現在

所有に記したということである。ところが『諸国江遣書状之留一』（『本願寺史料集成』）には別の寺が保持していたことを示す書状がいくつかある。

①（前略）然者対吉崎蓮如上人様御影ニ、准如様御裏書被遊候ヲ、勝授寺殿安置候由被聞召候、（後略）[5]

②（前略）将又蓮如上人様御影、三国ノ勝授寺殿ゟ請取可被持登候、（後略）[6]

③（前略）然者吉崎廿五日講蓮如様御影、先年ゟ勝授寺殿ニ預リ被置候得とも、去年御出入以後御本寺ニ被差置、即被召上候、右之御影先其元御坊ニ被指置候付、此度干福寺御供申御下向之儀候条、（中略）

猶々蓮如様御影此度御下向被成候間、輪番所ニ被差置、西方寺代下着迄者各番可被相勤候、当月廿五日、右之御影吉崎道場へ御供申、御法事相勤候者御守リ申罷帰、御坊ニ可被差置候、（後略）[7]

④（前略）然者吉崎廿五日講蓮如様御影、年来貴寺ニ御預ヶ置候へとも、向後福井御坊ニ被指置候旨仰ニ候間、左様ニ御心得可有之候、（後略）[8]

すなわち延宝（一六七三年頃）の頃は三国の勝授寺が預かっていた。①では本山がこれを知ることになった。②では福井御坊から一度御影を提出せよと本山は命じた。③では再び福井御坊で預れということになった。蓮師忌で吉崎へ持参しても直ちに持ち帰って福井御坊で保管せよということである。④では勝授寺に宛てて福井御坊にて蓮如真影を預かることにしたから承知してほしい由の文書である。「去年御出入」という理由で召し上げられたわけである。この「御出入」とはいわゆる〝吉崎山上の争論〟にかかる処置ではなかったろうか。その争論とは次のような事件であった。

寛文十三年（一六七三）より延宝五年（一六七七）の間、東西両派が吉崎山上の所有権をめぐって「諍論」し、ついには幕府の裁定にまかせられた。幕府は山上を官有とし、開山忌などは下の道場で行うこととされた。いわゆる喧嘩両成敗の判決であった。

両本願寺へ申渡覚

一、越前国吉崎・金津門徒不残教如へ依帰伏仕、旧跡も東方之由雖申之、今度相改候処西方之門徒両所ニ大分有之、其上吉崎山上へ寺再興之企之時、公儀へ届無之段東方越度ニ而候事、

一、同両所ニ西方之門徒大勢乍有之、東方より三月廿五日之法事七十年以来無懈怠相勤候を、西之旧跡と存候ハヽ可相改処、其通ニ而差置候儀越度ニ而候事、

右何茂誤有之、且又論所之旧跡依為要害地破却被仰付候、自今以後双方彼旧跡手入不可仕、開山法事之儀ハ山下之道場ニ而可致執行、永此旨可相守者也、

巳十一月十八日[9]

また、勝授寺の古文書古記録中に

蓮如影裏書

慶長十六辛亥五月廿二日

越前国坂北郡金津上野

吉崎廿五日講中

釋准如　御判

右者吉崎御影只今御坊ニ預り御裏之写[10]

というものがある。これによって勝授寺にあったことはほぼ間違いなかろう。なお、寛政四年頃につくられた『越前国御末寺帳』[11]を

見ても、福井御坊境内に浄善寺を見つけることができたが、金津の方では見当らなかった。『金津町の史話と伝説』ではどんな史料の裏付けがあって「金津浄善寺」としたのか疑問の残るところである。吉崎御坊後見に明善寺があたっていたというが[12]、それとの誤記かとも考えたのであるが、「勝授寺記（断簡）」という古文書には、

（前略）天正十七年丑暦川北二百五十ヶ村廿五日講御坊ト被仰付、即蓮如上人御自画且准如上人御書類奉頂戴、（後略）[13]

と見える。「川北二百五十ヶ村廿五日講」の講坊主として独自の地位を与えられている。さらに蓮如御影（御自画という）と准如上人よりの書付類をいただいたことがわかる。これによっても、勝授寺にあったことは否定できないのではなかろうか。

『修訂三国町史』に、「勝授寺は、吉崎御坊の名跡その他の栄典をあたえられることによって、専修寺門徒三、〇〇〇を興正寺へわたすの余儀なきにいたった。[14]」とあるが、吉崎別院の名跡をもらうことができたのはもと蓮如の御影があったからではないだろうか。

蓮如真影は一度本山に召し上げられたが、しばらくして福井御坊預りになったことは先に述べた。その後、毎年一月・三月・八月には吉崎へ御影を奉じて、蓮師忌ならびに祖師忌が行われたことが知られる。[15]法事が終わるとすぐに福井御坊の方へ戻ってくるわけであるが、何時から現在の「レンニョサン」の形態になったのか、すなわち蓮如真影が何時から福井から吉崎へ保管場所が変ったのか『本願寺史料集成』の収録範囲の寛政ごろまでの史料では見つけることができなかった。

ところが『福井県史』におもしろい古文書を見つけることができた。県史の解説では三業惑乱の一史料とみているようだが、まず必要な部分を少し長いが示そう。

（前略）別而蓮如様一条ハ先達而奉指上候願面ニ申上候通リ、一且国内和融相愁、則チ御坊所ニおゐて御寺法通を以御裁断被仰出、国内惣同行屈伏仕御請印形差上候ニ付、依而御本山表江御影様御下向被為在候様奉願上候、然処何之御故障も無之哉之所御封付ニ而御下向之儀全ク御一件ニ御取結ひ御和融之御手懸リ被為成、実ニ申分之人質も同様之為躰哉と一統疑心弥増ニ而甚夕悲歎仕候、然ル処此度御和融御請御調印も御上納被遊候ニ付、右御影様之儀御坊所御裁断之通リ吉崎御霊廟ニおゐて御開封被成下、一国同行共江拝礼ヲ為蒙、気味安心致候様厚御慈悲之程奉願上候、（後略）[16]

すなわち吉崎御坊の「御霊廟（オタマヤと読むのだろう）」で蓮如の御影を「開封」することを願い出ている。福井御坊から吉崎へ移ったことは記されず、本山から「御下向」されてはいるが、この古文書の書かれた頃に移ったものと想像できるところである。

注

（1）　中宗堂とは中興の宗主の御堂ということである。故佐々木教応師のご教示によれば「御廟堂（おたまや）」とも呼ばれた時期もあったようだ。天明・寛政期には「厨司堂」と称されていたことが『大谷本願寺通紀』吉崎別院縁由の条にみえる。

寛延三年、創蓮師影堂世称厨司堂於本堂左辺　、

（『真宗史料集成』第八巻　寺誌・遺跡五一六頁）

その他「蓮如堂」（『越前国名蹟考』）・「蓮如上人廟堂」などと時代別に呼ばれたようである。

(2) この「吉崎別院世話世話方」の語は故佐々木師のお手紙に書かれていた通りであるが、現在は単に世話方で通っているようである。

(3) 故佐々木教応師のご教示による。

(4) 土屋久雄編著『金津町の史話と伝説』一一頁

(5) 「本願寺史料集成」『諸国江遺書状之留』二〇四頁　延宝四年十二月八日条

(6) 同右書二〇四頁　同年月日条

(7) 同右書二七九頁　延宝六年三月十八日条

(8) 同右書二八二頁　同年四月廿日条

(9) 松平文庫御用諸式目の中の「吉崎浦蓮如上人旧跡山破却事」『福井県史資料編三』中近世一　六二～六三頁

(10) 井上鋭夫著『一向一揆の研究』八三三頁

(11) 同末寺帳は『越前国諸記一』（「本願寺史料集成」）に記載されている。同書の三七四～三八三頁参照のこと。

(12) 『大谷本願寺通紀』別院縁由の項の吉崎別院記にその記載がある。『真宗史料集成』第八巻　五六頁

(13) 井上鋭夫著『一向一揆の研究』八三四頁

(14) 『修訂三国町史』三八八頁

(15) 『諸国江遺書状之留一』　二九五頁

一吉崎道場へ蓮如様御影、御正忌砌計年中壱度拝被申、歎敷被存候由尤思召候、正月廿五日・七月廿五日両度者御影様御供申、其元御堂衆壱人宛罷越相勤可申候、三月廿五日ハ輪番御供申相勤可被申候、年中ニ右之通三度、御影様御入被成候様と之仰候間、可被得其意候

以上が関係本文であるが、福井御坊御堂衆が一月と七月に、また輪番が三月にそれぞれ蓮如真影を奉じて吉崎まで勤行に出る様子がうかがわれる。

(16) 『福井県史資料編4』中・近世二　二七一～二七二頁　勝授寺文書五〇

（補注）

先に本願寺派の「レンニョサン」の資料はないと記したが、脱稿後最近出版された『蓮如吉崎御坊と門徒』の中に朝倉喜祐氏が紹介していることを偶然に知った。

朝倉氏の調査によれば、「寛政十一年より文化十一年まで約一五年間中断されたが、約二百二十有年の伝統を持つ蓮如敬慕の法行事である（同書一三四頁）」ということである。